

自己点検・評価報告書の発刊にあたって

7年に1度認証評価を受けることが義務付けられてから、本学は初めてその時を迎える。それに先立って、『自己点検・評価報告書』を刊行し、評価に備えることとなった。

大学全入時代を迎え、大学の危機が叫ばれるようになってから、既に何年かが経過した。その間、どの大学もその危機を切り抜ける為の対策に奔走してきたようである。本学も、無論例外ではない。2003年の相模原キャンパス開学を契機として、青山スタンダードの確立、法科大学院、会計専門職大学院、法学研究科ビジネス法務専攻の設置など、意欲的に改革に取り組んできた。その成果は着実に上がってきていると言える。社会人教育の見直しという社会の要請にも、十分に応えている。

一方で、少子化時代に逆らうように、規制緩和に乗じて大学の新設が相次いで行われ、また、国立大学の独立法人化もあって、大学間の競争の激しさは往年の比ではない。殊に私立大学に於いてその傾向は顕著である。その結果、改革の最大の目的が人集めであるということになりかねないことになる。改革は、あくまで大学自身の向上の為でなければならない。無論、本学はその点は十分に念頭に置いているつもりである。

幸い、青山学院は「アカデミック・グランドデザイン」なるものを打出し、大学を含む学院全体の更なる発展を目指す姿勢を示している。その中で、大学は、青山キャンパス、相模原キャンパスにそれぞれ新学部を作る、経済学部と経営学部の新学部を作る、両学部の二部を解消するなどを目指すことになっている。目下、着々とその目標に向かって進行中である。また、青山キャンパスの再開発も謳われている。長い歴史の中でかなり老朽化が進んだ建物もあり、それらを建て直して、工場等規制緩和に応えようというわけである。短期的な計画ばかりではないが、これらの計画が全てより高い教育・研究を目指したものであることは言うまでもない。

ところで、認証評価で気になることは、評価自体の難しさである。確かに今回本学が刊行した報告書も、詳細に本学の各部署の点検を行い、正確に現状を記したものであって、仕上げには自信がある。ここから、教育・研究面での充実、施設面での気配り等に就いては、それなりの評価を得られると信じている。しかし、それらの中で暮らす学生がどのような人間として育っているかを見るのは、かなり困難である。実は、この部分こそが大学にとって最も大事なものだ考える。大学の社会的使命というものを問われる時、第一に挙げられるのが良い人間を社会に送り出すことであろう。これは、在学中より寧ろ学生が社会に出てからの評価となるのかも知れないが、少なくとも、本学ではキリスト教信仰に基づいたスクールモットーである「地の塩、世の光」を念頭に置いた学生生活を学生に送らせるように心掛けている。しかし、こういうことは数字やデータになって出にくいので、なかなか評価の対象にはならない。如何に完璧な施設を持っていても、それを学生が生き生きと利用し、人間としての成長に繋げられなければ意味がないのであるが。

とは言え、COEや現代GPでの成果を挙げている本学は、評価の対象になり難い側面も含めて、名実共に理想的且つ個性的な大学を目指して今後とも精進し、発展して行きたいと心から願っている。今回を含め、今後とも大方の厳しい御注文をお願いする次第である。

2007年3月

青山学院大学
学長 武藤 元昭